67

山根文策小伝
――特にその人脈を中心に――

志村　俊郎[1)]，都倉　武之[2)]
[1)] 独立行政法人 東京労災病院，[2)] 慶應義塾福沢研究センター

横浜十全病院長を務めた山根文策の生涯については，不明な点が多い．報告者らは，山根の生涯を，特に内務省衛生局，土筆ヶ岡養生園，永楽病院に関連する人脈を中心に検討し報告する．山根は，安政2年1月25日山口県萩に生まれ，明治16年6月東京医学校を卒業，医学士の称号を得，同年7月より高松病院長となっている．また東京医学校同期の卒業生には，後に山根が養生園を診療面で応援する北里柴三郎がいる．山根は，夫人アヤ子との間に一男二女があり，長女壽満子は，内務省衛生局長後藤新平を台湾民政局長に抜擢する台湾総督児玉源太郎の五男八郎に嫁し，また二女スハ子は，北里の次男善次郎と結婚した．山根は，明治24年7月より明治27年11月に帰朝するまで，ドイツ・ベルリン大学に留学し，内科の神経系病を研究した．ドイツ留学中には，同時期に留学中の後藤，北里，岡田国太郎との記念写真が残されている．帰朝後山根は，明治28年2月から11月まで東京医学校で同級の浅田決，黒柳精一郎の後任の第七代内科教室教授として第四高等学校に赴任した．

以上のように東京医学校・内務省衛生局に連なる人脈に加え，山根には養生園・北里・福澤諭吉に連なる人脈の形成を見ることができる．当時の死亡第一位である肺結核治療を目的とする専門病院である養生園は，明治26年福澤の支援により北里が設立してその運営は一切院長としての北里が担当し，山根は，副医長嘱托として勤務した．山根と福澤との交流を示す直接的資料として，明治30年1月30日及び同年8月6日の福澤書簡が残されており，いずれも精神変調を来した塾生に関する相談に関連するものである．慶應義塾の「衛生顧問」の如き役割を果たしたといわれる養生園に対する福澤の厚い信頼の一端を山根が担っていた様子が推し測られる．また山根は，明治31年9月及び明治34年1月の福澤の脳卒中発作の際，神経学の立場から医師団に加わったことも両者の関係の深さを示している．

その後，山根の内務省・北里に連なる衛生行政への関わりは，永楽病院長就任へと繋がっていく．永楽病院は，明治17年より春秋二期に東京医学校その他の病院に要請し行われていた医術開業実地試験場に供用する患者を収容することを兼ねることを目的とした特種の医院として設置され，同院創立の明治30年7月，内務省衛生局長後藤が同院主管に就任すると共に，臨時検疫局事務官兼内務技師の山根は，内科医長に任命され，同年9月には医術開業試験主事にも任命された．翌明治31年3月，同病院主管は，後藤の後任内務省衛生局長の長谷川泰に変更になり，永楽病院拡張に伴い専任院長を置くこととなり，山根は明治32年4月，医術開業試験付属病院長（永楽病院長）に就任，明治36年6月に職を退くまで，地方の伝染病視察並びに医術開業試験の出張等衛生行政にも貢献した．

医術開業試験は，開始以来内務省の所管に属していたが，政府はこの費用を文部省に付属させることとしたため，これに反対した内務省衛生局長長谷川は，明治35年10月に辞任した．この経緯に関しては，医術開業試験の受験者に，長谷川の創立した済生学舎の生徒が多く，試験に対する影響力を維持できないことに長谷川が反対したとも報じられたが，この移管問題が山根の退任とも関係する可能性は高い．事実，永楽病院の経費については，後藤より長谷川に与えられた明治31年3月9日付の衛生局長事務引継ぎ書に，医術開業試験の収入を充用する計画が記されており，山根が，北里を介して，後藤，長谷川両者とも深い人的ネットワークの中にいたことが，推し測られる．その後，山根は，明治39年3月より大正7年まで横浜十全病院の第二代院長を務め「横浜医師界の泰斗」（『横浜社会辞彙』）と称せられ，大正7年4月14日に歿している．

本報告では，山根文策という忘れられた一人物を通して，内務省衛生局を巡る人脈の一側面を明らかにしようとするものである．